

シリーズ・信仰の父アブラハム②
罪、憐れみ、そしてとりなし

(創世記一九・一〜二九)

先週ほど人間の罪について考えさせられた週は無かったのではないかと。特に米国大手テレビ局のW E B版で放映されたヨルダン人パイロットの殺害動画には戦慄させられた。しかし私の戦慄は身体のみがえりを信じるイスラム教徒のからだを生きたまま焼き殺しているということと同時にその動画を編集した人の目から来るものであった。「彼」の目はこの凄惨な現場を数百回も見続け、そして最大限の恐怖を視聴者に与えるべく加工しているのだ。その目の何と冷酷な事か。この悪は間違いなく人間の所業である。

このような状況下においてこのテキストが開かれた事は時宜を得ている。なぜならソドム滅亡の物語の中にも人間の罪がこれでもかとばかりに書かれているからである。以下人間の罪の三つの性質について考えたい。

一、暴力と倒錯

アブラハムのもとを離れた二人の御

使いがソドムに着いた時、ロトは伯父と同じようにこの旅人を歓待した。しかしこの二人はアブラハムの時とは異なり、一度は家に迎えられないのを固辞する。しかしロトはしきりに勧め、彼らは客になった。そして夜、ロトが彼らを自宅に泊めた理由が明らかになる。ソドムの町者がロトの家を取り囲み、ロトに客となった二人を連れ出すように迫ったのだ。「知りたい」とはヘブライ語では性行為を指すのにも用いられる。彼らはこの二人を凌辱しようとしたのだ。ちなみに英語で「男色」を意味する「ソドミー」の語源はここにある。彼らは倒錯していた。後にパウロが言う「自然の用を不自然に変えること(参ロマー・二七)」を平気で、しかも暴力と言う手段によつて達成しようとしたのである。そこにあるのは肉欲の充足であり、他者の尊厳を奪う無神経さである。これらは全く罪と言うほかないものである。

二、差別と排除

だがロトはこの無体な要求を拒んだ。その時彼らはどうしただろう。「ひっこんでいろ」「いつはよそ者だ」「何を偉そうに」「じゃあまずはおまえをひどい目に合わせてやろう」と口々に言つて、ロトに詰め寄り、からだを激しく押し付けたのである。この一連のことばの裏側には差別と排

除がある。ロトがソドムに移り住んだのはアブラハムがハガルによつてイシュマエルを得た八六歳よりも前だから、どう少なく見積もっても十三年はそこに住んでいた。しかし彼らの目にロトは「よそ者」に過ぎなかつた。またあくまで旅人を守ろうとして、ソドムの悪習に加担しないロトの態度は彼らにとつて格好の「排除」の対象となつた。数にモノを言わせた彼らはなんとロトに対して洗濯デモの洗礼を浴びせたのである。これもまた罪の諸相である。

三、不信仰

ここまでの罪は滅ぼされたソドムの人々の罪である。しかし物語を見ていくと罪はまたロトの心をもむしばんでいるのが解る。戸口に押し付けられたロトは突然強い力に引つ張られ、家に引き入れられる。助けたのはあの二人、即ち主の使いである。彼らはロトにこれから起こることを告げ、この町から逃れることを命じた。しかし一六節にはこうある。「彼はためらつていた。なぜためらつたのだらうか?理由は推し量るしかないが、学者たちは一致してロトが家族とその悪の町で得た財産を捨てる事が出来なかつたからだとする。考えてみよう。ロトは少し前にこの二人の力の腕によつて守られたのではなかつたか。またあの暴徒たちが一瞬にして目をくらませ

られたことを彼は見た。にもかかわらず、彼はためらつたのである。命令はこれ以上なく簡単、「あなたのいのちのために逃げよ(一七節直訳)」それだけであつた。しかしロトはそれだけのことが出来なかつたのだ。ここにも人間の罪がある。

* * *

その時ロトは自らの腕がまたつかまれたのを感じた。そしてその尋常ならざる力によつて彼らは町から引きずりだされた。救われたのだ。創世記の記者はここに注解をいれる。「主の彼らの対するあわれみによる(一六節)」。そう、ロトが救われたのはただただ主のあわれみによつたのである。またソドムの町の滅亡を記した後には「神はアブラハムを覚えておられた。それで、のがれさせた」とある。もう一度言う。ロトが救われたのはロトに神を喜ばせる何かがあつたからではなく、単に神の憐れみのゆえ、また伯父アブラハムのとりなしの祈りを通してであつた。私たちは今も罪の世に生きている。パイロットの血は女囚の血を呼び、血で血を洗う惨劇が今も各所で繰り返されている。何をすべきだらうか。答えは一つしかない。憐れみぶかい主の力のみ腕に期待して、とりなしの祈りを捧げることだ。キリエ・エレイソン(主よ、憐れみたまえ)。アーメン。